

講演要旨

道徳の「根拠」

大庭 健（専修大学）

「道徳の根拠」という論題は、きわめて多義的、悪くいえば曖昧、よくいえば豊穡ないし多産的である。これは一般的には「根拠」という概念が多義的だからでもあるが、さらに、こと道徳にかんしては、1.根拠を問う観点が多様だからでもあり、2.問うこと自体もまた無規範ではなされえないからである。以下、まずこれらについて超簡単に確認する。

1.法、習俗、文法などなどとならんで、道徳という規範が通用している。これは、社会的な、ひいては（「自然」という概念を、やや問題なしとはしないが拡張していえば）自然誌的な、事実である。では、この事実の根拠を問うとは、いったい何を問うことなのか？これは、もちろん論者の問題関心によって多種多様であるが、大きくいって、つぎのような問題群に分岐しよう。

1-1.道徳の通用という事実の、因果的な（発生的ないし機能的）説明、

1-2.道徳の通用という事実の、機能的な正当化

1-3.もっかの、ないしあるべき道徳にしたがう理由

これらは、単独で完結した問を構成するわけではないが、しかし相対的にはそれぞれに特有の方法的要請を伴う。雑にいえば、1.は、つとにゴルギアズ、カリクレスによって問われ（ニーチェやロシア・マルキストによって反復され）た、道徳心理学・道徳社会学の間であり、通常の実証科学の要請に服する。2.は、心理システム・社会システムにかんするなんらかの正常状態を想定し、それへの寄与を論じるという、評価的な観点を必要とする。3.を問うことは、さらにそれを超えて、どういう人間でありたいか、どういう社会を欲するかという実存的な投企となる。しかし、このことは3.にのみ固有な事態なのではない。

2.道徳の根拠を論じるとき、ことに道徳心理学・道徳社会的な考察に傾けば傾くほど、論者は、あたかも自分がいっさいの規範から自由なゼロ点という

高みから、道徳に縛られた大衆の言動を観察しているかのように錯覚する。
(ニーチェの金切り声よりも、ボードレールのドスのきいた詩のほうが魂に響くのは、このせいでもある)。道徳の根拠を問うということ自体、すでに・そのつど、現に他にたいして何かであるものとして、他に対してさらに働きかける営みであって、道徳は、この営みにも及んでくる。生きているかぎり免れえないこの事実にも盲目的自己チュー児が「無根拠」を声高にしゃべり始めるときには、その議論もどきは、ボクだけはフリーライドしていいという自己特権化しか語られてはいない。そうであることが、非常に多い。

最高善から反復へ

小泉 義之 (宇都宮大学)

道徳とはルサンチマンである(ニーチェ)。ルサンチマンを免れた人間は、もはや人間ではない(ドゥルーズ)。したがって、道徳の根拠を問うことは、人間の生命の根拠を問うことに相当する。「規範の基礎」(日本倫理学会)や「道徳の理由」(叢書エチカ)を問うことは、人間の生命の基礎や理由を問うことに相当する。どうして道徳的である(べき)かという問いは、どうして人間として生きるのかという問いに相当するのである。あるいはむしろ、そのような相当性が成り立つ次元において問いを立てなければ、倫理学はたやすく経験的で通俗的な倫理(人倫)をめぐるお喋りに陥ってしまう。そして実際、近年の良心的講壇学問の席卷もあって、学知としての倫理学は忘れ去られようとしている。私は、この動向に対峙したいと考えているし、その上で、学知としての倫理学を別の仕方でも突破したいと考えている。

そこで第一に、カント『実践理性批判』「弁証論」を、先の相当性が成り立つ次元において解釈したい。第二に、カント「弁証論」が、ラカン『精神分析の倫理』のごとく、ドゥルーズ『差異と反復』のいう「時間の第二の総合」ないし「純粹過去」に留まっていることを示したい。第三に、このカント＝ラカンの閉塞状況がまさに現代思想の閉塞状況に等しいことを示唆したい。第四に、この閉塞状況を、お喋りに墮して忘却するのではなく、ドゥルーズとともに

「時間の第三の総合」ないし「反復」へと突破していきたい。

本当は、経験論・通俗哲学・講壇学問などは黙殺して、緊急に分子生物学や自然科学をめぐる迷信を批判して未来の倫理を創出するのが務めだと考えているが、多少後向きであっても、落とし前だけはつけておきたいと考えてもいる。

自由・民主主義道德の根拠

笹澤 豊（筑波大学）

道德の根拠を問題にする場合、我々はどのような道德の根拠を、あるいは道德の何を、問題にすべきなのか。古代ギリシアの道德と西洋近現代の道德が違うように、あるいはアフリカの部族と日本の道德が違うように、また、同じ日本でも、戦国時代や江戸時代の道德と第二次世界大戦後の道德が違うように、さまざまな道德の形がある。

そこで、そういう諸形態に共通する「道德の本質」をこそ問題にすべきだ、という考え方が生じることになる。だが、その場合、ではその「道德の本質」とは何なのか問題になるだろう。「エゴイズムの否定」が「道德の本質」だと考える人がいる。彼は、「〈実害なき密室での違反〉が可能な状況があったときでも、なぜ我々は自分の欲望の充足や自己利益の追求を控えなければならないのか」と問うことになる。同様に、「人を殺さないこと」が「道德の本質」だと考える人は、「なぜ人を殺してはいけないのか」と問い、「利他的な行為の強制」がそれだと考える人は、「利他主義の可能性」（ネーゲル）を問うことになる。——そういうアプローチの仕方は、それなりにおもしろい。特に私は、（利他主義を擁護し、倫理的利己主義を退けようとする）ネーゲルの議論に関心を持っている。ネーゲルの論理を批判することで、逆に倫理的利己主義を擁護できるのではないかと考えている。そこで今回、それをやろうと考えたが、いろいろ考えて、結局やめることにした。というのは、抽象的な議論ではなく、もっと具体的な道德の形を、つまり、今日我々がそのなかに住ん

でいる道德の形を取り上げ、その根拠を問題にしてみたいと思ったからである。

我々が住んでいる道德、それは、「権利の平等」の理念をかかげる自由・民主主義の道德に他ならない。そういう道德を、ニーチェは、弱者の「畜群本能」に由来するキリスト教道德の派生物とみなした。このニーチェの見解を、我々はどう受け止めればよいのか、それを考えてみたいと思う。